いまよう言葉づかいの陥穽

田口 晃

ふりかえってみると、私達は、漢語、やまと言葉、カタカナ語をとり混ぜた驚くべき言語生活を営んでいることに気づく。たとえば石狩街道沿いの「茨戸耕北橋バス停」はアイヌ語、北を耕すという漢文の音読み、「はし」と言うやまと言葉、それにカタカナ語と音読み漢字というまことに異質・多彩な組み合わせからなっている。言語学者に言わせれば特に混乱していることにもならないらしいが、政治や行政の場ではこうした言葉遣いの異常な多様さ・でたらめさは、厄介な状況を生んでいる。

一つはカタカナ語が次々に取り入れられていることに係わる。新語の翻訳が在庫の漢語で間に合わず、造語をしても漢字では今やカタカナ語より普及しにくい。それに「新しそうな感じ」がカタカナ語にはある。行政の分野でカタカナ語が氾濫気味のようだ。ここ数年気になっているのが「コミューニティー」と言う語である。以前は「共同体」と翻訳し、七〇歳から上の人間には、「共同体規制」などと言う言葉とともに、「因習的で個の自由を縛る集団」と言った側面から理解され、批判されてきたものだ。六年前にカナダで暮らした時、アメリカのテレビでコミューニティーが連発されているのに驚いた。その頃から日本の行政の世界でも流行してきたようだ。指示対象をみると町内会と社会福祉協議会のことらしい。コミューニティーの対語であるアソシエーションの方は、個人が自発的意思でつくるつながり方なのだが、カタカナ語としても訳語の「結社」にしてもあまり普及していない。私たちが二〇年来普及に努めてきたNPOは公益を作る自発的結社である。こちらはカタカナ語を飛び越してアルファベットを使った。こうした新語を通じて自発的結社と言う発想に新しい息吹を吹き込もうとしたわけである。機能不全に陥っていた社団・財団に反省をもたらし、自発的結社の本来の姿に多少ともつなげようとする公益法人改革につながるなど、事情は少し変わって来つつあるようだ。この調子でアソシエーションが次々と生まれてくる社会環境と言語環境を作っていきたい。

もう一つは、耳触りのよい婉曲表現(Euphemism)が好まれる傾向である。TVとネットの時代、政治では場の設定（アジェンダ・セッティングなどとここでもカタカナが平気で使われている）を行うものが優位に立つ。その際、自分たちの使う言葉で状況を定義し、それを通用させてしまえば勝負ありである。そこで、耳に心地よい言葉を選んで普及させることに腐心する。政治の世界でも電通の出番となる。「日本をとりもどす」とは意味不明だが、かなりの人に親しみがかんじられたらしい。「景気回復は、この道しかない」になると脅迫じみていて婉曲語法としては不出来だし「積極的平和主義」に至っては、婉曲表現どころか、オーウェルが『一九八四年』の中で警告したニュー・スピークそのものではないか。戦争を平和と言い、平和を戦争と呼ぶ、あれである。

こうした厄介な言語環境の中で、私たちの対応の仕方はいろいろあろう。指示対象と言葉に含まれる価値判断を明確にする、という基本的な姿勢がまず第一。次いで、一見やや迂遠だが、「そういう言葉は、わたくしの店では扱っておりません」という故石川淳の名せりふを生かしてみることも大切ではないか。ちなみに私の店で扱っていないのは「御主人・奥さま」のセットと「勉強」と言う言葉、それに「コミューニティー」である。問題を抱えた現状を固定化するだけで、改革には向かわない用語法だと思うからだ。「積極的平和主義」となれば、憲法九条を目標に、軍縮の提案から、あらゆる分野での交渉・交流を盛んにして東アジアの緊張緩和を進めて行く、と言う安部首相とは逆の方向の使い方しか考えられない。

＜たぐち　あきら・NPO推進北海道会議代表理事
北海道大学名誉教授＞